

氏名	関根 正
学位の種類	博士（看護科学）
学位記番号	博甲第 7563 号
学位授与年月	平成 27 年 10 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	自閉スペクトラム症者の自己モニタリング機能の活性化を促す看護介入プログラムの有用性の検討
主査	江守 陽子 博士（医学）
副査	古谷 佳由理 博士（看護学）
副査	笹原 朋代 博士（保健学）
副査	徳田 克己 教育学博士

論文の内容の要旨

（目的）

自閉スペクトラム症者の自己の特異性を踏まえ、かつ、自己モニタリング機能の活性化を促す看護介入プログラムを作成し、さらにそれを実施したうえで、その有用性を検証することを目的とする。

（対象と方法）

対象者は、A デイケアを利用する自閉スペクトラム症者とし、二次的障害の安定している 18 歳以上の者 20 名である。

看護介入プログラムは、1 回から 6 回を認知的介入、7 回から 10 回を行動的介入とする全 10 回の個人面接によるプログラムとした。面接は週 1 回、50 分から 60 分で行い、対象者は実践練習を繰り返すことにより、評価、再計画を行い課題に対する個々人の対処法を明確にした。

プログラムの評価には、主要評価項目である自己モニタリング機能を認知行動的セルフモニタリング尺度により、客体的自己を意識する傾向を私的自意識尺度により、対人機能を対人応答性尺度により、看護介入プログラム施行前後での得点を比較した。

（結果）

分析対象は 16 名であった。平均年齢 29.6 歳、デイケアの利用期間は平均 28.4 か月、利用目的は対人関係スキルの向上が最も多かった。

看護介入プログラム実施前後の比較においては、認知行動的セルフモニタリング尺度では、行動モニタリング得点の実施前中央値は 15.0、実施後は 22.0、環境モニタリング得点の実施前中央値は 19.5、実施後は 23.0、モニタリング認知得点の実施前中央値は 10.5、実施後は 21.0 であり、すべての得点において実施後が高かった。よって、自己モニタリング機能が高まったことが認められた。私的自意識尺度得点は、実施前中央値は 29.0、実施後は 50.0 であり、実施後が高かった。よって、客体的自己に対する意識が高くなったことが認められた。また、SRS - II (self - report) は、実施前総得点の中央値は 101.0、実施後値は 70.0 であり、すべての得点において差は認められなかった。一方、SRS - II (others - report) は、実施前総得点の中央値は 96.5、実施後は 67.5 であり、すべての得点において実施後が低かった。よって、客観的にみた対人機能の改善が認められた。

看護介入プログラムのプロセスでは、第 1 回面接は現在の自分について客観的に認識できた者が 11 名、できなかった者が 5 名、第 2 回面接では自閉スペクトラム症について理解した上で自分との関連を自覚できた者が 13 名、できなかった者が 3 名、第 3 回面接では全員が自身の課題を挙げる事ができた。

第 7 回面接から第 10 回面接では、同様の目標に繰り返し取り組んだ者と目標を追加・変更しながら取り組んだ者がいたが、実践練習を繰り返すごとに全員の達成度は向上した。また、自分の変化に対する認識についての語りから、カテゴリ【自分の内面を意識できるようになった】と、【対人関係を意識できるようになった】が生成された。

(考察)

看護介入プログラム実施前後の比較から、認知行動的セルフモニタリング尺度得点と私的自意識尺度得点が高くなったことが認められ、また、自分の変化についての語りから、カテゴリ【自分の内面を意識できるようになった】が生成されたことから、看護介入プログラムの実施によって自己モニタリング機能の活性化が促されたことと、客体的自己を意識する傾向が高まったことが示唆された。

また、自己モニタリング機能の活性化によって客体的自己を意識する傾向が高まり、自分に対する意識が高まったことが示唆された。一方、SRS - II (others - report) の総得点が実施後に低くなり、また、自分の変化についての語りから、カテゴリ【対人関係を意識できるようになった】が生成されたことから、看護介入プログラムが対人機能の改善に影響を与える可能性が認められた。本看護介入プログラムでは、リフレクション支援と外化支援は、自分に関する事柄を可視化させる介入、自己説明支援と外化支援は、自分がコントロールすべき課題を認識しやすくする介入となり、さらに、実践練習とその客観的評価、再計画を繰り返したことが、自分に意識を向けることや自分を意識しながら行動することを経験したことになったと考えられた。さらに、個人面接としたことが、対象者特有の問題に合致させるのに有用であったと思われる。

審査の結果の要旨

(批評)

自閉スペクトラム症の診断を受ける患者の数は年々増加し、精神科病院での入院・外来患者数やデイケア利用者数も増加の一途をたどる現状にあつて、本研究は社会的ニーズに呼応した、時宜を得た研究といえよう。また、本研究の結果は、自閉スペクトラム症者の中・長期的な社会適応や主観的 QOL の改善のための看護の成果を実証しただけでなく、日常的な看護に取り入れやすく、汎用性の高い介入プログラムのひとつを構築することができたと言える。こうした一連の研究の過程は、研究者としての情熱と能力に支えられていただけでなく、自閉スペクトラム症者への優しいまなざしとケア・マインドにあふれたものであり、看護研究者としてその姿勢と志は高く評価できる。

以上を勘案し、本研究は博士論文としての水準に十分達していると判断される。

平成 27 年 6 月 2 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よつて、著者は博士（看護科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。